

かきやける
荒野

大城立裕

新潮社

かがやける
荒野



大城立裕

かがやける荒野こうや

一九九五年二月一〇日 発行

著者 大城立裕おおしろ たつひろ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話 編集部 〇三―三三六―五四二

読者係 〇三―三三六―五二二

振替 〇〇―一四〇―五―八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小
社読者係宛お送り下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。



価格はカバーに表示してあります。

©Tatsuhiro Oshiro 1995, Printed in Japan

ISBN4-10-374003-5 C0093

かがやける荒野

梅雨明けの噴きこぼれるような太陽光線を断ち切るように、トラックやジープが軍用道路を行き交う。この道路は戦争の前にはバスが、寒村の数々を結んで日に一往復するだけであったが、沖縄で戦争が終わったと思ったら、米軍が重機の力でいきなり幅ひろく押しひろげて、島を南北に貫く幹線道路の一つにし、五号線とよぶようになった。轟音が道路をはさんだ住民部落の家々を押しつぶさんばかりで、簡易舗装に敷いた石粉の砂塵がふくれあがる。

そのなかを縫って道路を横断するのが楽ではない。轢かれたら轢かれ損で、車がそのまま逃げ去れば追跡のしようもない。

連れ立って嘉間良の部落を出てきた家族の三人は、しばらく立ち止まって、なんとなく風景をながめる。

戦前は越来村と美里村であったあたりを、戦後になって米軍が、その十キロほど南のあたりまでをコザ地区とよんで新しい行政区画を作ってしまった、そのなかで最も賑やかなこのあたりをコザとよぶようになった。

たしかに賑やかには違いない。車両交通が多く、週末になれば軍作業の労務者たちが一斉に帰

省する。戦争が終わったときに米軍がここに捕虜收容所を作ったので、そのまま居ついて軍作業で食いつないでいる人が多い。

ただ、賑やかなだけで、まだ都会とはいえない。

戦争が終わって二年、水の涸れた田圃にも家が建ったりしているから、雨が降ったらひどいぬかるみである。道路の向こう側は照屋部落に安慶田部落、そこから南へ一キロほど行くと、室川部落の向こうが十メートル以上もある崖で遮られ、その上は米軍が機材をあつかう部隊をおいてある。その部隊の兵隊たちは、崖の上から綱をおろして女たちをひきあげて遊び、用がすんだらまたそこから降ろす、という話をさきごろ聞いた。戦争に負けたら、どこの国でもそういうことがあるのだろうか、と静が言ったら、なに、沖縄だけだろうと重徳が事もなげに答えたので、静が面白くない顔をした。それがヨシ子には可笑しかった。

いま三人で道路横断の機会をねらいながら、ヨシ子はそのことを思い出した。

「なにを思いだし笑いしているねえ？」

静が見咎めて言ったので、いえいえと打ち消したとたんに、それ今だと、さすがに重徳は男ですばしこく、走って渡った。

左へ二百メートルも行けばコザ十字路があり、交通巡査がいて横断歩道もあるのだが、そこまで足を運ぶのが億劫である。なにしろ道路を横切るために遠回りすることに慣れていない。

「ハッサ、これが自分の郷里かと思うさあ」

渡りきったところで、重徳がぼやいた。そのすぐ前で、アメリカの黒い顔が重徳の顔を見お

ろして、なにを勘違いしてか頷くと白い歯をみせて笑った。

「笑うとまっくろな顔でも可愛いんだけどよ」

静が独りごちた。

嘉間良では、ときたま女に飢えた連中が部落に忍びこんでくるので、木に吊るした酸素ポンベを打ち鳴らして撃退することもある。この照屋には、逆にそういう連中を求めて女が集まってきて、昼間でも肌の色の黒い兵隊たちが、ガムを噛み噛み女を物色して歩いている。

照屋にはポスポスとよばれて身体からだのバラ売りをする女たちが集まっていた、そこに黒人兵たちが寄ってくるが、となりの安慶田部落にはハーニーと呼ばれる専用が、一軒ずつを構えさせてもらっている。

重徳は大工の仕事でハーニーの家の物置を造ったことがあり、そのときのハーニーがユタ（巫女）をしていると聞いた。その判示とウグワン（祈願）を買いに、いま行こうとしている。

ハーニーのことをヤマトではオンリーというそうだが、ハーニーのほうが可愛らしいかと、次男の重夫がシベリアから復員してきたばかりのころ言った。ハーニーというのは蜂蜜のことで、オンリーというよりもずばり愛人を意味すると、そのうちヨシ子は覚り、そのことを重夫に言うのと、重夫はしきりに感心し、誰に教わったかと尋ねた。ヨシ子は誰に教わったか憶えていず、重夫の驚きがただ可笑しかった。ついでにいえば、ヤマトでパンパンとよんでいるバラ売りの女のことを、なぜ沖縄ではポスポスとよぶか、とも重夫は疑問を出した。ポスとはブッシュということだろうと見当はつくが、なにか露骨すぎる感じでヨシ子は知らぬふりをしている。

照屋と安慶田を限る路地をはいつていく。

左手の照屋の部落では、焼け残った萱葺きの家もあり、軍から払い下げでもらったり「戦果」でせしめてきたりしたトタンで葺いた家もあり、それらが行儀のわるいかたちで並んでいる。その家の一つからいきなり兵隊が出てきたと思ったら、その後を追うようにして出てきた女が、あらためて抱きついてキスをした。それを見た静がヨシ子のほうを見て、唇をとがらし眉根をよせて呆れてみせた。

静もヨシ子も重徳も、HBTとよばれるカーキー色のアメリカ軍服を仕立てなおして着ているので、女が白いワンピースを着ているのが珍しくみえた。

「あれ、パラシュートかねえ」

静が言ったが、ヨシ子も重徳も答えなかった。どこかでパラシュートの布で芝居の衣裳を仕立てて芝居をしたと聞いたことがあるが、ポスポスやハーニーたちがそういう仕立てをしていると聞いたことはなかった。

しばらく行つて右へ折れると、さすがに猥雑な雰囲気は薄れて、なかには外壁をペンキ塗りなどした瀟洒な構えもあり、それがハーニーの家だと思ふと、なんとなく胸がほんわかしてくる。訪ねる先の天久純子は、さいわい家にいた。トタン葺きの五坪の母屋に台所の下屋をさしかけているが、それに重徳が最近になって物置をつけた。

このなかに一人かねえ、と静が配給でもらった軍靴を脱ぎながら小さな声で言ったら、重徳がこれも小さな声で、ときどき二人さあと答えた。

一人でも二人でもしかし、これなら狭いくらいだと思つた。木造りながら椅子が三つもあつて、やはり白木の小さなテーブルを囲んで置かれてゐるからだ。そのそばにベニヤ板で仕切られてゐるのは、その奥が寢室だということだ。これなら居間が寢室を兼ねてゐる自分たちの家のほうが、たつた五坪でも広く見えるくらいである。

天久純子は想像してゐたより若かつた。ユタ（巫女）というから、なんとなく中年以上だと思ひこんでゐたものだが、ハーニーとなれば、やはり若いわけだ。三十くらいか。やさしげな丸顔に細い眉と、ときたまするどく走る眼光が、どことなくアンバランスだが、これがハーニーとユタとを兼ねてゐる女というに相応しいのかも知れない。ほかの女たちと違って、どこから仕入れたか花模様のブラウスを着てゐた。それで男は将校か下士官だろうと見当がついた。

壁に農民らしい初老の男の写真が貼りつけてあつた。掌くらいの大きさで、皺くちやになつてゐるのは、戦場を持ち歩いたからであらうと察しがつき、これは天久純子の父親に違ひないと思うと、ヨシ子は純子に絶大な頼り甲斐をおぼえ、ひとりで合点した。

父親を尊敬することとユタの能力と、どう関わるかと問われると困るが、このさいヨシ子のなかでは疑いなく結びついた。それはあるいは、自分が戦場で家族を見失つたのだらうかと、日頃人知れぬ不安をもつてゐる潜在意識から來たのかも知れないが、彼女自身まだそこまでは氣がついてゐない。

「幽霊を退治してくださる、と聞いたものですから」

と、静が率直に訪問の趣旨を告げた。

「退治するわけではありませんが、ウグワンで幽霊を出なくすることはできます」

天久純子は神妙に答えて、事情を尋ねた。

受け答えは、だいたい静がひきうけた。重徳は道案内だけである。

「幽霊を見るのは、この子です……」

と、静はヨシ子を眼だけで指し、つづいて多少の事実をごまかして伏せながら説明した。

ごまかして伏せたのは、ヨシ子が静と重徳の子ではないという事実のことである。ただ、これを抜きにしては趣旨説明が徹底しない憾みがあったが、天久純子とその不徹底の部分はどうでもよいという顔をしたのは、助かった。

知りあったのは戦場でのことである。摩文仁の壕に籠もっているところを、外から二世らしい下手な日本語でよびかけられて、戦争が終わったことを知り、幌つきのトラックに乗せられて捕虜収容所まで行くうちに、夫婦は眼の前にいるヨシ子のが気がなった。紺のモンペに着物を着ているが、トラックが荒廃した道路を走って大きく揺れるたびに、怯えたように片手でモンペの前をおさえ、片手で着物の襟を無理にもかきあわせようとする仕種が、静には目立った。静は持ち前の気さくな言葉づかいで名を訊いたが、答えなかった。家を訊いても、眉間に皺をよせる表情をしただけで答えなかった。ヨシ子の顔は人並みに垢じみてはいるが、額がひろく眉が太く、眼鼻立ちがくつきりとしたところが、聡明そうな感じをあたえている。ただ、応答がはかばかしくないのは、これは大切な記憶を失っているのに違いないと、そのうち理解がいった。

「まるで日本を見失ったようなものだな」

と重徳が言ったのは、収容所での生活が身につき、メリケン粉の糊ばかり食わされて、米の飯と日本の国を忘れかけたところである。

ヨシ子は連れもない様子で、たぶんなにかのショックで記憶を失い、家族とも離ればなれになったのだらうと、夫婦で話しあい、そのまま同伴することにした。ヨシ子という名は静がかりに付けたものである。訛りに中頭なかつがみと那覇がまざりあっているので、中頭のどこからか那覇に寄留しているのだらう、と見当をつけたが、探しようもない。那覇は都会で人口も多いし、それにいまは米軍が焼けただれた市街地を物資集積所にするために、住民の立入禁止地区に定めていて、もとの那覇の人たちは郊外に住んでいるのだというから、家族を探すのも大変だ、ということになった。だいいち、家族の一人でも生きているという保証はない。

夫婦は姓を名渡山なびやまといい、北谷村ちやたん字平安山へんざんの出身である。いま北谷は村の大部分が嘉手納かてな飛行場や陸軍病院などの米軍用地に吞みこまれていたので、そこに帰ることができず、かりに越来村の嘉間良部落に住んでいる。いつまでここにいいのか分からないが、戦争に焼きほろぼされた戸籍も戦争がおわって一年目の九月に再整備の方針が規則のかたちで公布され、翌年つまり今年の三月から事務がはじめられたので、そのさいヨシ子も名渡山の姓で立てた。一応別の籍にしてあるが、実家の家族をみつけるまでは、この家族のようなものだ。

家族が一人ふえたといっても、食糧ははじめのうち米軍の無償配給であったから、格別に負担になることはない。そのうち有償になったところには、ヨシ子は嘉手納航空隊のメスホール（軍食堂）に「ナドヤマ・ヨシコ」という名で勤めて、週日は航空隊のカンパン（労務者宿舎）に住み、

週末だけに帰省するようになった。生活費に差し支えはなく、見た眼には一応世間の娘と違くない。

もちろん、世間なみに仮に造った五坪の家に同居したが、今年の一月に次男の重夫が復員してきて、同居するわけにいかなくなった。かりにも血のつながらない娘である。長男が沖繩に戦争が来る前に南方で戦死したということを、重夫は聞いて納得したが、兄のかわりのように見知らぬ娘がいるのを見て、これにはあらためて首をかしげた。

追いつくのではなく、さいわい西側に空き地があるから、増築の下屋を二間半も出せば、それがヨシ子の部屋になると、重徳と静の意見が一致したとき、ヨシ子は感謝した。さいわい今の世間では、地主が誰だか分からないままに、土地を勝手に使うのが珍しくない。

「有難うございます」

と頭を下げたとき、静がじつとその仕種を見て、しみじみ言った。

「きつと、いい家の娘だはずだけどねえ」

ヨシ子は、それにどう答えてよいか困って照れたが、ここでも甘えるほかはなかった。

とにかく甘えて下屋を出してもらったわけだが、そこに一人で寝るようになった日に、幽霊を見たのである。たしかに幽霊かと家族に問いつめられてみれば、はじめての体験で曖昧なところはあったが、あれこれ思いあわせ話しあって、それはたしかに幽霊に違いない、ということになった。

灯を消して床につくと、眠りに落ちないうちに兵隊の服装をした男がヨシ子の枕元に立って、

彼女を見下ろしているのであった。暗いなかで見えたのだから、たしかに尋常ではない。決して夢でもない。兵隊はなにか言いたそうな風情であるが、ただヨシ子を見つめるだけだ。ヨシ子は怖いながらも誰にも言わず、その顔が自分の記憶を失った過去と関わりがあるのかどうか、次の帰省までカンパンで一週間考えた。とくに彼女が恐怖をふくらませたのは、兵隊が父親であつたら、と思いついたときである。二週目の帰省のときも同じように現れたので、ついに沈黙に耐えられず家族だけに訴えるに及んだ。父親かという疑いのことは伏せた。

家族のなかでこの訴えにまず異議を言いたてたのは、さすがに最も若い次男の重夫である。初年兵の教育を鹿兒島で受けたかと思つたら、すぐに満州の戦線に送られ、戦後はソ連の捕虜としてシベリアに送られた。さいわい第一陣の引揚げに加えられたが、その短い期間にさえ強制労働のなかの飢餓に苛まれた。幻視というものを、彼は経験はないが聞いて知っている。しかし、それは極度に飢えたあぐく朦朧としたときのものであつて、戦場でもなく、戦争も終わつて体力も回復したところでそういうことは信じがたい、というのであつた。

重夫が異議を出したけれども、げんにヨシ子が怖がるので、家族としては捨ててもおけなかつた。

照屋とか安慶田とかにハーニーがユタを兼ねて、幽霊退治にすぐれているそうだと、静が噂を聞いてきて、そのウグワンを買おうと言いだした。

これに重徳がはじめ難色を示した。彼はそのハーニーを知っているが、ハーニーとユタが同一人のなかに同居しているということが、彼には納得できない。ハーニーは半分アメリカがかって

いて、ユタは純粹に沖縄のものだろう、と考えている。しかしよく当たるといふからと、静が強調した。判示が当たただけでない。幽霊を撃退するウグワンが専門だそうだから、このさいは持つてこいではないか、と主張した。

「それにも専門といつてあるか」

重徳は納得しなかつた。日頃、あまりユタを信じないたちである。頭のなかでも大工の定規をかまえている風情だ。

「でも、みんな言っているよ、幽霊をよく見るって」

「幽霊を見るのは、ヨシ子のほうでないか」

「でも、見るから退治ができるんじゃない？」

とにかく会ってみようということになったのが、事の起りである。重徳は道案内だけならと引きうけた。

会ったとたんに、肝心のヨシ子がユタを信賴する氣になつたのは、まず幸いであつた。

天久純子が簡単に承諾して、ウグワンの日取りの相談ができると、静があらためて部屋を見まわした。見まわしたところで、男のものらしい色もののシャツが一枚、壁にかかっているほかに、それほど珍しいものがあるわけでもないのに、半ば退屈しのぎに皺くちな父親の写真に眼をとめていると、天久純子が身の上話をはじめた。

自分のいまの生活に後生(ごち)（冥土）の父親がびっくりしているはずねえ、という話からはじめた。父親は沖縄に戦争が来る前に大陸で戦死しているから、その写真を持ちあるいたのだが、家族

が連れだつて島尻を逃げまわっているうちに、祖母と二人の弟をつぎつぎに失い、最後に母が死んだ。それから一週間たつて捕虜になり収容所に運ばれた日に幻聴があった。お前は海のむこうから来た人の面倒を見なければならぬ、というのであった。さらに半年後に軍作業に洗濯婦として出ているうちに、サージャン（曹長）と知りあつて交際がはじまつたので、幻聴の意味はこのことであつたかと気がついたが、そのうちサージャンが夢でたびたびうなされた。純子はいつのか見よう見真似で、サージャンのためにウグワンをしていた。いつその技術を身につけたのか、自分でも分かりません、と説明したところで、静が深く頷いたのは、そろそろ純子に傾倒しはじめたからである。

「すると、サージャンがすぐにハシットなつたのです」

天久純子が言つたとき、そのハシットという、健康になつたという意味の土地言葉しちごが決まつた感じで、ではヨシ子もかならずハシットにしてみせようと静が決意したのは、彼女としていかにも自然なことであつた。

「あれは大丈夫かね」

天久純子の家を辞して家に帰りつくと、重徳がまだ半信半疑という顔をした。静はこれに、「大丈夫さあ。ウチナーグチ（沖縄語）でアメリカの幽霊までも退治するといふんだから、実力あるんでない？」

それからアハハと、大きな声で笑つた。この声は戦場で飢えていたころにも、ヨシ子をはじめて言葉をかわしてまもなく、トラックを降りながらヨシ子の度胆を抜いたものである。静がト

ラックを降りながら、モンペを穿いていない女の場合はまる見えだねえと、自分で笑いとばしたのであった。飢えている声ではなかった。

しかし、このさいは笑ったあとですぐに付け加えた。

「私は信じるね」

静の言いは明快であつた。天久純子というユタの身の上話が真に迫っていたから、というのである。ヨシ子は、自分が信じる理由とおなじだと思つた。

嘉間良の部落はゆるやかな盆地で、南は嘉手納飛行場に接した米軍部隊に見下ろされ、北は石川市へ通ずる軍道路をへだてて美里村の部落に接しているが、それに並んで、もとは人通りもありない寂しい部落外れであつた場所を、いまでは軍がダンプ（塵捨て場）にしている。ここに戦車が擱坐していて、これをいつ誰が片づけるかと気になることもあるが、とりあえず地主はその周囲を耕している。そういうなかで、村役場だけでなく、銀行の支店や警察、それに露天ながら劇場までできた。戦争が終わって一年目には、公営の劇団がきて芝居をしたものである。

もともとの越来村民だけでなく、名渡山一家のように、他村の人が自分の村に入れなくなつて居すわつた者も少なくないから、もとの部落のなかだけでなく、畑にまでもびつしり家が建ちならんだ。

塀はなく、壁も平和なときなら板張りの二重壁なのを、この節は一重で、柱に筋交いをつけるだけで間に合わせ、ときにテント布で代用した家もある。台所はほとんど下屋である。もちろん